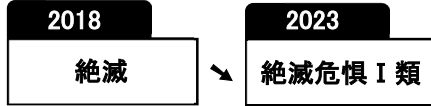


トピック情報

● 維管束植物

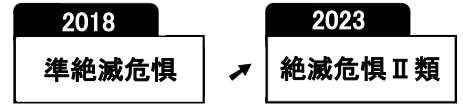
コキンバイザサ



宇都宮市
撮影：星 直斗

日本では宮城県以南から知られているが稀種である。花は黄色で直径1cm位。葉はスゲの仲間に似る。県内では大田原市・宇都宮市・栃木市から古い記録があるが、1968年以後の記録はなく、絶滅したと思われる。2020年8月宇都宮市内の林内で7株に花を確認した。2021年には同所で7、8、10月に1株ずつで花を確認した。2022年に同所で30株ほど確認した。近隣の山にも似た環境があるので探しているが、まだ他所では見つかっていない。
(園部力雄)

ホソエカエデ

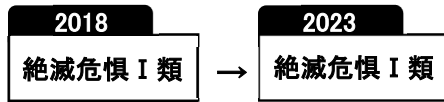


日光市
撮影：星 直斗

主に本州中部に分布する、雌雄異株（雌株と雄株が別個体）のカエデである。普通種であるウリハダカエデによく似ているが、葉裏の脈上に毛がないこと、脈腋に小さな水かき状の膜があること等で区別される。県内における主な生育地は日光市餅ヶ瀬であり、13個体を確認した。しかし、最近の調査によって、雌株が2個体のみであることが明らかとなり、種子による更新が心配される。また、2019年に多数の一年生個体を確認したが、ほとんどが消滅した。
(星直斗)

● 蘚苔類

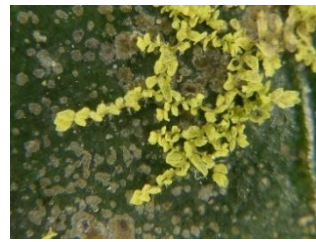
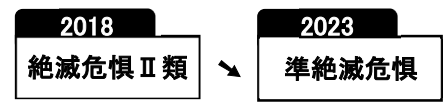
ナンジャモンジャゴケ



日光市
撮影：富永 孝昭

本種は、氷河期の生き残りともいわれる、蘚苔類の中でも特異な存在の蘚類である。主に高山帯の湿った岩場に生育するが、県内の生育地は比較的low海拔で、太平洋側に位置する針葉樹林下に位置する点でも貴重な生育地である。およそ20年間、新たな生育地が確認されておらず、生育環境の崩壊消失、温暖化の影響等による環境悪化による絶滅が危惧される。
(富永孝昭)

カビゴケ

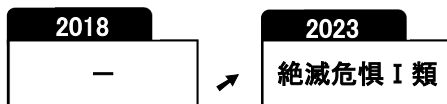


那珂川町
撮影：富永 孝昭

栃木県内では、主に足尾山地と八溝山地に生育する葉上苔類。アオキなどの常緑樹の葉上面に着生することが多いが、落葉樹や一年生草本類に生育することもある。懸垂性蘚類のキヨスミトゴケと同所的に生育することが多いが、本種の方がやや分布が広い傾向がある。生育確認が増加しているため準絶滅危惧にランクダウンしたが、地球温暖化によって生育地が広がるのか、環境変化によって減少するのか、注目を要する。
(富永孝昭)

● 藻類

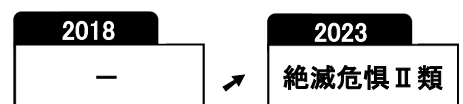
セイロンフラスコモ



壬生町
撮影：富永 孝昭

ため池等に生育するフラスコモ類の一種。国内各地から報告されているが、生育地は多くない。農業環境の変化により、灌漑用のため池が利用されなくなり、水質が悪化したり、埋め立てられるなどして、シャジクモ・フラスコモ類の生育地が減少している。県内では、平野部のため池1か所で確認されているが、近年はため池に水が貯まらなくなり、現在は見られない。
(富永孝昭)

カワモズク

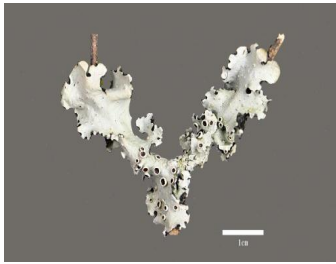
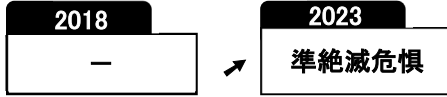


日光市
撮影：富永 孝昭

県内各地の湧水域に生育する淡水産紅藻類。カワモズク類を野外で見分けることは困難であり、検鏡して雌雄同株を確認する。平野部に比較的多くみられるチャイロカワモズクは雌雄異株であることから容易に見分けられるが、栃木県内には足利市の芋森神社がタイプ産地のニホンカワモズクや、那須塩原市の天然記念物に指定されているノギカワモズクの生育が知られており、今後の分類学的検討が必要である。
(富永孝昭)

● 地衣類

ナメラゴンゲンゴケ

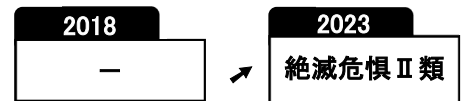


鹿沼市
撮影：小澤 武雄

灰白色の小形の葉状地衣。背面は粉芽・裂芽・パステュールを欠き、裸子器を密生する。腹面は褐色から黒色で、偽根は二叉分枝する。日本では千葉県、静岡県、京都府、広島県、徳島県、愛媛県、高知県、宮崎県の暖温帯の山地から報告されている。栃木県では、2020年の調査で、鹿沼市から初めて発見された。植栽のツツジの枝に着生し、個体数も少ない。この産地以外では確認されておらず、生育地の環境の変化による絶滅が危惧される。
(小澤武雄)

● 菌類

レモンツブタケ

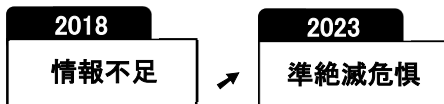


鹿沼市
撮影：山本 航平

地中に球状の子実体を形成する、地下生菌の一種。主にヨーロッパから報告されていたが、2021年に鹿沼市で採集され、日本新産種として報告された。本種は、石灰岩の分布域に生育するブナ科などと共生する菌根菌である。鹿沼市の産地は石灰岩の採石場付近に位置しており、採石場の拡大などが生育への脅威となりうる。
(山本航平)

● 哺乳類

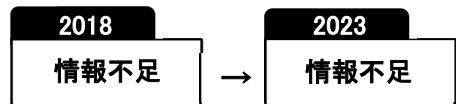
ユビナガコウモリ



県南東部
撮影：安井 さち子

日本では本州～屋久島に分布する洞穴性コウモリ。県内で初めてとなる本種の出産哺育場所が確認されたが、生息地の観光化による影響が懸念されている。ユビナガコウモリは数千から数万個体の出産哺育集団を形成することが知られ、国内で確認されている出産哺育場所は十数カ所しかない。森林の上や川の上など開けた空間で、飛びながら昆虫を食べる。
(安井さち子)

ミズラモグラ

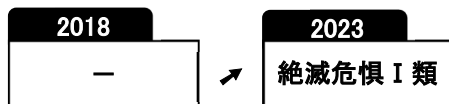


鹿沼市
撮影：廣瀬 章裕

ミズラモグラはこれまでに、日光市で5件、鹿沼市で4件、足利市で1件の計10件確認されている。低山帯から高山帯での記録が多いが、足利市では標高190mで採取されており、高地の森林以外でも生息することが確認されている。確認数が少ない要因として元来生息数が多くないこともあるが、外見が県内に広く分布するアズマモグラと似ているため誤認されている可能性も否めない。本種はアズマモグラに比べ尻尾が長いことが特徴で、通常後足の1.5倍以上の長さとなる。
(近藤慧)

● 鳥類

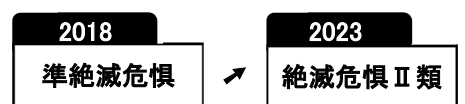
シマクイナ



栃木市
撮影：深井 宣男
環境省鳥類標識調査における捕獲個体

本種は、ロシア極東地域や中国東北部などで繁殖する小型のクイナで、湿原に生息する。従来栃木県では極めて稀な旅鳥と考えられていた。しかし、近年における関東地方での広範囲にわたる詳細な調査によって越冬状況が明らかになった。本県でも2015年冬期に渡良瀬遊水地で少なくとも1羽の越冬が確認され、2020年にも越冬が記録された。本県での個体数は極めて少ないことから、今回新たにレッドリスト種の絶滅危惧Ⅰ類に選定された。
(平野敏明)

ヨシゴイ

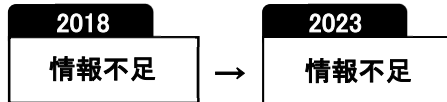


栃木市
撮影：平野 敏明

ヨシゴイは、本県には主に夏鳥として平野部の河川や湖沼のヨシ原に生息・繁殖するが越冬記録もある。しかし、2020年代では本県における主要な生息地である渡良瀬遊水地でもその生息数が減少傾向にあり。さらに県内の河川や湖沼のヨシ原では定期的な生息が確認されていない。そのため、さらに生息状況が悪化したと判断され、準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類（Bランク）にランクを上げた。
(平野敏明)

● 爬虫類

タカチホヘビ

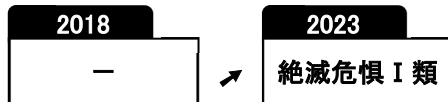


栃木県自然環境基礎調査（1993～2000年）以来の長年にわたる情報蓄積にも関わらず、本種に関する生息情報は他の爬虫類に比べて極めて少ない。
標高130～930mの丘陵地から山地にかけての森林で生息が確認されているが、絶滅の危険度を評価することが特に難しい種である。
(林光武)

鹿沼市
撮影：林 光武

● 両生類

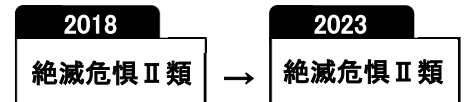
イワキサシヨウウオ



茂木町
撮影：菱沼 知仁

従来トウキョウサンショウウオと呼ばれていたサンショウウオのうち、福島県、茨城県などに分布するものが、主にミトコンドリアDNAと核DNAの違いに基づいて、2022年7月に新種として記載された。栃木県では茂木町の限られた場所のみ生息し、種の分布域の西端にもなっている。生息地では保全対策が行われており、生息状況は良好だが、繁殖地が非常に限られているため、今後アライグマによる被害等、生息への脅威となる事象の発生に注意する必要がある。
(林光武)

ムカシツチガエル

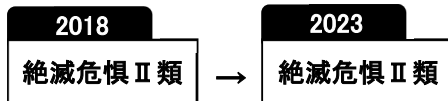


茂木町
撮影：菱沼 知仁

ツチガエルの分類が見直され、栃木県を含む関東地方産などのものは、2022年8月に新種記載されたムカシツチガエルとされた。本県でツチガエルと呼ばれてきたカエルの分類の変更（標準和名と学名の変更）であるため、生息状況やランクの変化は伴わない。ただし、本県に狭義のツチガエルも生息する可能性があることに留意する必要がある。なお、本種と狭義のツチガエルは、幼生（オタマジャクシ）の腹側の模様（腹面腺の分布パターン）で識別できるが、成体はよく似ている。
(林光武)

● 魚類

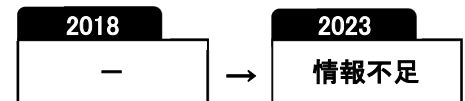
キンブナ



真岡市
撮影：石川 裕之

小川や用水路、ため池など、人の暮らしに近い環境を好んで生活するため、土地改良事業や河川改修等による影響を受けやすい。本種はフナ類で最も小型のため、捕食されやすくオオクチバスなどの外来魚やコイが多数生息するため池等で個体群を維持することは困難である。また、カワウによる被害の影響が懸念される。生息地が孤立している場所も多く、このような環境にある個体群はいつ消滅してもおかしくない状況にある。外見が類似するギンブナも含め今後も個体数の減少が懸念される。
(佐々木慎一)

キタドジョウ

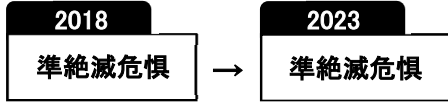


上：キタドジョウ
鹿沼市
(撮影：寺内 文明)
下：ドジョウ
栃木県なかがわ水遊園
(撮影：渡辺 敬晴)

ドジョウと比べて体全体が細長く、顔も細長いなどの特徴が挙げられている。2017年にキタドジョウという和名を付けてドジョウから分離されることになった。外形だけで判別することは難しいが、遺伝子解析を併用した調査によって、日光市、鹿沼市、矢板市など県内の複数の地域で生息が確認された。比較的水温の低い河川の上流域で生息が確認される例が多い。国内では北海道、東北、関東、北陸地方で生息が確認されているが、キタドジョウとドジョウは同じ水系で混在していて自然分布域の詳細は不明である。
(小川浩昭)

● 甲殻類

ヌカエビ

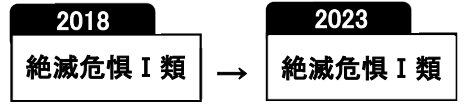


上：ヌカエビ
大田市
(撮影：南谷 幸雄)
下：カワリヌマエビ類
上三川町
(撮影：南谷 幸雄)

主に平野部の主要河川や細流、池沼などに生息している。体サイズや生態がよく似た東アジア原産の外来種カワリヌマエビ類が侵入し、生息地や餌資源をめぐる競合が懸念されている。那珂川や鬼怒川、思川の downstream 側には外来種カワリヌマエビ類が生息し、上流側にはヌカエビのみが生息しており、中間には両者の混生地域がある。2017年に比べて2022年にはカワリヌマエビ類が上流に向かって分布を拡大したことが明らかになったため、ヌカエビの分布の変化に注目する必要がある。(南谷幸雄)

● 淡水産貝類

メンカラスガイ

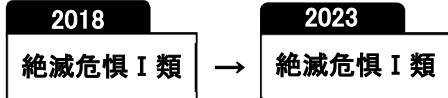


栃木市
撮影：南谷 幸雄

かつてカラスガイと同種とされたが、近年の遺伝子解析を含む再検討により、本州太平洋岸と新潟県、琵琶湖に分布するものは本種とされたため、今回のレッドリスト改訂で種名をカラスガイからメンカラスガイに変更した。平野部の湖沼や大河川の入り江に生息するが、栃木県における確実な記録は、渡良瀬遊水地のみ。栃木県では1984年を最後に記録が途絶えていたが、2017年に再発見され、その後の調査で100個体以上が生息していると推計されている。ただし、未成熟個体はわずかししか発見されており、個体群の維持に懸念が残る。(南谷幸雄)

● 陸産貝類

アツブタガイ



足利市
撮影：南谷 幸雄

アツブタガイは栃木県を北・東限として本州、四国、九州に広く分布するが、栃木県では足利市で1978年以前に得られた2例の情報のほかに記録は見当たらなかった。近年の調査の結果、2018年に40年ぶりに足利市の既知の産地で生息を確認したほか、足利市内5ヶ所の新産地を発見した。さらに、佐野市内でも1ヶ所の産地が発見され、わずかではあるが、これまでに知られていたよりもさらに東側にも分布することが明らかになった。(南谷幸雄)

カタマメマイマイ

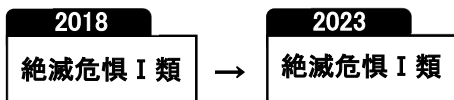


佐野市
撮影：南谷 幸雄

栃木県では、カタマメマイマイの情報は日光市で得られた1個体の白化した死殻のみだった。しかし、2018年に人為的攪乱の極めて大きな環境で生体が採集され、大きな河川にかかる橋のたもとコンクリート擁壁に生育する雑草の落葉層などを中心に調査を行った結果、足利市、佐野市、栃木市、小山市、宇都宮市、塩谷町などで生息地が次々に発見されたため、今回の改訂ではランクを準絶滅危惧とした。しかし、生息環境は人為的攪乱を強く受ける場所であるため、今後の個体群の動向に注意が必要である。(南谷幸雄)

● 昆虫

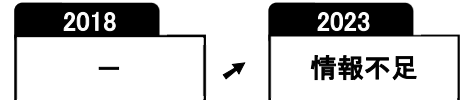
アオヘリアオゴムシ



芳賀町
撮影：大川 秀雄

アオヘリアオゴムシは、栃木県では1963年を最後に記録されていなかった。しかし、ここ数年、県内で相次いで見つかリ、宇都宮地域で5か所、足利栃木地域で1か所とほかに高根沢町から記録された。本種の個体数は回復傾向にあるようで、全国各地で報告例が増えている。回復の理由は不明であるが、温暖化が一因との考えもある。生息環境はおもに河川付近の水田や休耕田といった湿地環境で、栃木県ではタガメと同所的に生息していることが多いという報告もある。(大川秀雄)

フジキオビ

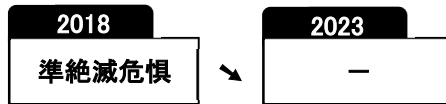


那須塩原市
撮影：末本 一己

本種は昼行性のガで、関東地方以西の本州、四国、九州に分布し、栃木県は分布の東限にあたる。垂直分布は広く、標高100mの低山地から1000m以上の山地まで見られる。栃木県では1970年頃には足利市北部、佐野市北部の低山地で比較的普通に見られたが、現在はほとんど確認されていない。山地においては、少数の記録があるだけで詳細は明らかではなかったが、最近、那須塩原市、鹿沼市、日光市の山地で棲息が確認された。本種は、全国的に減少しており、絶滅危惧種に指定している県も多い。隣県の群馬県では絶滅危惧 I 類に指定されている。今後、本県での棲息状況を注視する必要があり、情報不足とした。(末本一己)

● 土壌動物

ゲジ



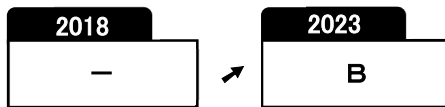
これまで、栃木県内におけるゲジの詳細な分布は明らかにできていなかったが、最近の調査によって、30 地点以上で生息が確認され、県内の低地に広く分布することが明らかになった。とくに、雑木林や河川敷などで普通に見られることから、絶滅のおそれは低いとしてレッドリストから削除した。

(南谷幸雄)

宇都宮市
撮影：南谷 幸雄

● 植物群落

馬坂沢のハルニレ群落

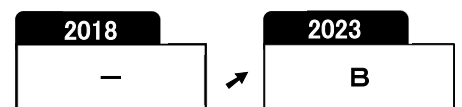


日光市
撮影：星 直斗

馬坂沢沿いには、50 本ほどのクロビイタヤ（県絶滅危惧Ⅱ類のカエデ）が、標高 1040～1090m に点々と見られる。このクロビイタヤは、主に崖錘斜面や河床にあるハルニレやケヤマハンノキ等の群落内に生育している。土呂部川流域の標高 920m には、同様の立地環境に 200 本ほどのクロビイタヤが生育するハルニレ群落が確認されており、県内では以上の 2 地域においてクロビイタヤが確認されている。クロビイタヤが生育するハルニレ群落として保全の必要性が高いと考えられ、今回新たに掲載することとした。

(星直斗)

船生のフモトミズナラ群落



塩谷町
撮影：逢沢 峰昭

フモトミズナラは、北関東（栃木県・群馬県）と東海地方（愛知県・岐阜県・長野県南部）の標高約 500m 以下の土壌層が浅い立地などにみられる珍しいナラである。船生演習林では普通にみられ、コナラとともに広葉樹二次林の優占種となっている。生育環境が土壌層の浅い土地であり、定期的な伐採によって群落が維持されてきた可能性があること、遺伝資源保存上、高い価値があると考えられ、今回新たに掲載することとした。

(逢沢峰昭)